

与謝野晶子 訳

# 源氏物語

松風卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

松風

紫式部

與謝野晶子訳

あぢきなき松の風かな泣けばなき小琴  
をとればおなじ音を弾く  
(晶子)

東の院が美々しく落成したので、花散里はなちるさとといわれていた夫人を源氏は移らせた。西の  
対から渡殿わたどのへかけてをその居所に取って、事務の扱い所、家司けいしの詰め所なども備わつ  
た、源氏の夫人の一人としての体面を損じないような住居すまいにしてあった。東の対には明  
石しの人を置こうと源氏はかねてから思っていた。北の対をばことに広く立てて、かりに  
も源氏が愛人と見て、将来のことまでも約束してある人たちのすべてをそこへ集めて住  
ませようという考えをもっていた源氏は、そこを幾つにも仕切つて作らせた点で北の対  
は最もおもしろい建物になった。中央の寝殿しんでんはだれの住居すまいにも使わせずに、時々源氏が

来て休息をしたり、客を招いたりする座敷にしておいた。

明石へは始終手紙ていしゅていしよが送られた。このごろは上京を促すことばかりを言う源氏であった。女はまだ躊躇ちゆうちよをしているのである。わが身の上のかいなさをよく知っていて、自分などとは比べられぬ都の貴女きじよたちでさえ捨てられるのでもなく、また冷淡でなくもないような扱いを受けて、源氏のために物思いを多く作るといふ噂うわさを聞くのであるから、どれだけ愛されているという自信があつてその中へ出て行かれよう、姫君の生母の貧弱さを人目にさらすだけで、たまさかの訪問を待つにすぎない京の暮らしを考えるほど不安なことはないはんもんと煩悶はんもんをしながらも明石は、そうかといつて姫君をこの田舎いなかに置いて、世間から源氏の子として取り扱われないような不幸な目にあわせることも非常に哀れなことであると思つて、出京は断然たんぜんしないとも源氏へ答えることはできなかった。両親も娘の煩悶するのをもっとにも思われて歎息たんそくばかりしていた。入道夫人の祖父の中務卿なかつかさきやう親王が昔持つておいでになつた別荘が嵯峨さががの大井川のそばにあつて、宮家の相続者にしかとした人がないままに別荘などもそのままに荒廢させてあるのを思い出して、親王の時か  
らずと預かり人のようになってゐる男を明石へ呼んで相談をした。

「私はもう京の生活を二度とすまいという決心で田舎へ引きこもつたのだが、子供に

なってみるとそうはいかないもので、その人たちのためにまた一軒京に家を持つ必要ができたのだが、こうした静かな所にいて、にわかには京の町中の家へはいつて気も落ち着くものでないと思われるので、古い別荘のほうへでもやろうかと思う。そちらで今まで使っているだけの建物は君のほうへあげてもいいから、そのほかの所を修繕して、とにかく人が住めるだけの別荘にこしらえ上げてもらいたいと思うのだが」

と入道が言った。

「もう長い間持ち主がおいではならない別荘になって、ひどく荒れたものですから、私たちは下屋しもやのほうに住んでおりますが、しかし今年の春ごろから内大臣さんが近くへ御堂うの普請をお始めになりました、あすこはもう人がたくさん来る所になっておりますよ、たいした御堂ができるのですから、工事に使われている人数だけでもどんなに大きいかしれません。静かなお住居すまいがよろしいのならあすこはだめかもしれません」

「いや、それは構わないのだ。というのは内大臣家にも関係のあることでそこへ行こうとしているのだからね。家の中の設備などは追い追いこちらからさせるが、まず急いで大体の修繕のほうをさせてくれ」

と入道が言う。

「私の所有ではありませんが、持っていていらつしやる方もなかったものですから、一軒家のような所を長く私が守つて来たのです。別荘についた田地なども荒れる一方でしたから、お亡くなりになりました民部大輔さん（みんぶだいゆう）にお願いして、譲っていただくことにしましてそれだけの金は納めたのでした」

預かり人は自身の物のようにしている田地などを回収されないかと危うがつて、権利を主張しておかねばというように、鬚（ひげ）むしやな醜い顔の鼻だけを赤くしながら顎（あご）を上げて弁じ立てる。

「私のほうでは田地などいらない。これまでどおりに君は思つておればいい。別荘その他の証券は私のほうにあるが、もう世捨て人になつてしまつてからは、財産の権利も義務も忘れてしまつて、留守居料（るすい）も払つてあげなかったが、そのうち精算してあげるよ」

こんな話も相手は、入道が源氏に関係のあることをにおわしたことで気味悪く思つて、私慾（しよく）をそれ以上たくましくはしかねていた。それからち、入道家から金を多く受け取つて大井の山荘は修繕（しゆけん）されていった。そんなことは源氏の想像しないことであつたから、上京をしたがらない理由は何かと怪しんでは、姫君がそのまま田舎に育てられていくことによつて、のちの歴史にも不名誉な話が残るであろうと源氏は歎息（たんそく）され

るのであったが、大井の山荘ができ上がったから、はじめて昔の母の祖父の山荘のあったことを思い出して、そこを家にして上京するつもりであると明石から知らせて来た。

東の院へ迎えて住ませようとしたことに同意しなかったのは、そんな考えであったのかと源氏は合点した。聡明<sup>そうめい</sup>なしかただとも思ったのであった。惟光<sup>これみつ</sup>が源氏の隠し事に関係しないことはなくて、明石の上京の件についても源氏はこの人にまず打ち明けて、さっそく大井へ山荘を見にやり、源氏のほうで用意しておくことは皆させた。

「ながめのよい所でございまして、やはりまた海岸のような気のされる所もござい  
す」

と惟光は報告した。そうした山荘の風雅な女主人になる資格のある人であると源氏は思っていた。

源氏の作っている御堂は大覚寺の南にあたる所で、滝殿<sup>たきどの</sup>などの美術的なことは大覚寺にも劣らない。明石の山荘は川に面した所で、大木の松の多い中へ素朴<sup>そぼく</sup>に寢殿の建てられてあるのも、山荘らしい寂しい趣が出ているように見えた。源氏は内部の設備までも自身のほうでさせておこうとしていた。親しい人たちをもまたひそかに明石へ迎えに立たせた。

免れがたい因縁に引かれていよいよそこを去る時になったのであると思うと、女の心は馴染深い明石の浦に名残が惜しまれた。父の入道を一人ぼっちで残すことも苦痛であつた。なぜ自分だけはこの悲しみをしなければならないのであろうと、朗らかな運命を持つ人がうらやましかつた。両親も源氏に迎えられて娘が出京するというようなことは長い間寝てもさめても願つていたことで、それが実現される喜びはあつても、その日を限りに娘たちと別れて孤独になる将来を考えると堪えがたく悲しくて、夜も昼も物思いに入道は呆としていた。言うことはいつも同じことで、

「そして私は姫君の顔を見ないでいるのだね」

そればかりである。夫人の心も非常に悲しかった。これまでもすでに同じ家には住まず別居の形になつていたのであるから、明石が上京したあとに自分だけが残る必要も認めてはいないものの、地方にいる間だけの仮の夫婦の中でも月日が重なつて馴染の深くなつた人たちは別れがたいものに違ひないのであるから、まして夫人にとっては頑固な我意の強い良人ではあつたが、明石に作つた家で終わる命を予想して、信賴して来た妻なのであるからにわかに別れて京へ行つてしまうことは心細かつた。光明を見失つた人になつて田舎の生活をしていた若い女房などは、蘇生のできたほどにうれしいのである



が、美しい明石の浦の風景に接する日のまたないであろうことを思うことで心のめいることもあった。これは秋のことであつたからことに物事が身に沁しんで思われた。出立の日の夜明けに、涼しい秋風が吹いていて、虫の声もする時、明石の君は海のほうをながめていた。入道は後夜ごやに起きたままできて、鼻をすすりながら仏前の勤めをしていた。門出の日は縁起を祝つて、不吉なことはだれもいっさい避けようとしているが、父も娘も忍ぶことができずに泣いていた。小さい姫君は非常に美しく、夜光の珠たまと思われる麗質の備わっているのを、これまでどれほど入道が愛したかしかない。祖父の愛によく馴染んでいる姫君を入道は見て、

「僧形そうぎようの私が姫君のそばにいることは遠慮すべきだとこれまでも思いながら、片時だつてお顔を見ねばいられなかつた私は、これから先どうするつもりだろう」と泣く。

「行くさきをはるかに祈る別れ路ぢにたへぬは老いの涙なりけり

不謹慎だ私は」

と言つて、落ちてくる涙を拭い隠そうとした。尼君が、京時代の左近中将の良人おっとに、

「もろともに都は出いできこのたびや一人野中の道に惑はん」

と言つて泣くのも同情されることであつた。信頼をし合つて過ぎた年月を思うと、どうなるかわからぬ娘の愛人の心を頼みにして、見捨てた京へ帰ることが尼君をはかなくさせるのであつた。明石が、

「いきてまた逢ひ見んことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼まん

送つてだけでもくださいませんか」

と父に頼んだが、それは事情が許さないことであると入道は言いながらも途中が気づかわれるふうが見えた。

「私は出世することなどを思い切ろうとしていたのだが、いよいよその氣になつて地方官になつたのは、ただあなたに物質的にだけでも十分尽くしてやりたいということから

だった。それから地方官の仕事も私に適したものでないことをいろんな形で教えられたから、これをやめて地方官の落伍者らくこの一人で、京で輕蔑けいべつされる人間にこの上なつては親の名誉を恥ずかしめることだと悲しくて出家したがね、京を出たのが世の中を捨てる門出だったと、世間からも私は思われていて、よく潔くそれを実行したと私自身にも満足感があったが、あなたが一人前の少女になつてきたのを見ると、どうしてこんな珠玉を泥土でいどに置くような残酷なことを自分にしたかと私の心はまた暗くなつてきた。それから私は仏と神を頼んで、この人までが私の不運に引かれて一地方人となつてしまふようなことがないように願つた。思いがけず源氏の君を婿に見る日が来たのであるが、われわれには身分のひけ目があつて、よいことにも悲しみが常に添つていた。しかし姫君がお生まれになつたことで私もだいぶ自信ができてきた。姫君はこんな土地でお育ちになつてはならない高い宿命を持つ方に違ひないのだから、お別れすることがどんなに悲しくても私はあきらめる。何事ももうとくにあきらめた私は僧じやないか。姫君は高い高い宿命の人でいられるが、暫時さんじの間私に祖父と孫の愛を作つて見せてくださつたのだ。天に生まれる人も一度は三途さんずの川まで行くといふことにあたることだとそれを思つて私はこれで長いお別れをする。私が死んだと聞いても仏事などはしてくる必要はない。死

に別れた悲しみもしないでおおきなさい」

と入道は断言したのであるが、また、

「私は煙になる前の夕べまで姫君のことを六時の勤行ごんぎょうに混ぜて祈ることだろう。恩愛が捨てられないで」

と悲しそうに言うのであった。車の数の多くなることも人目を引くことであるし、二度に分けて立たせることも面倒めんどうなことであるといつて、迎えに来た人たちもまた非常に目だつことを恐れるふうであつたから、船を用いてそつと明石親子は立つことになつた。

午前八時に船が出た。昔の人も身にしむものに見た明石の浦の朝霧に船の隔たつて行くのを見る入道の心は、仏弟子ぶつでしの超越した境地に引きもどされそうもなかった。ただ呆然ぼうぜんとしていた。

長い年月を経て都へ帰ろうとする尼君の心もまた悲しかった。

かの岸に心寄りにし海人船あまぶねのそむきし方に漕こぎ帰るかな

と言つて尼君は泣いていた。明石は、

いくかへり行きかふ秋を過ぎつつ浮き木に乗りてわれ帰るらん

と言つていた。追い風であつて、予定どおりに一行の人は京へはいることができた。車に移つてから人目を引かぬ用心をしながら大井の山莊へ行つたのである。

山莊は風流にできていて、大井川が明石でながめた海のように前を流れていたから、<sup>すまい</sup>住居の変わった氣もそれほどしなかつた。明石の生活がなお近い続きのように思われ、悲しくなることが多かつた。増築した廊なども趣があつて園内に引いた水の流れも美しかつた。欠点もあるが住みついたならきつとよくなるであらうと明石の人々は思つた。源氏は親しい家司<sup>けいし</sup>に命じて到着の日の一行の饗応<sup>きやうおう</sup>をさせたのであつた。自身で訪ね<sup>たず</sup>て行くことは、機を作ろう作ろうとしながらもおくれるばかりであつた。源氏に近い京へ来ながら物思<sup>ものし</sup>いばかりがされて、女は明石<sup>あかし</sup>の家も恋しかつたし、つれづれでもあつて、源氏の形見の琴<sup>きん</sup>の絃<sup>いと</sup>を鳴らしてみた。非常に悲しい氣のする日であつたから、人の来ぬ座敷で明石がそれを少し弾<sup>ひ</sup>いていると、松風の音が荒々しく合奏をしかけてきた。

横になっていた尼君が起き上がって言った。

身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

女むすめが言った。

ふるさどに見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰たれか分くらん

こんなふうにはかながつて暮らしていた数日ののちに、以前にもまして逢あいがたい苦しさを切に感じる源氏は、人目もはばかりずに大井へ出かけることにした。夫人にはまだ明石の上京したことは言つてなかったから、ほかから耳にはいつては氣まずいことになると思つて、源氏は女房を使いにして言わせた。

「桂かつらに私が行つて指図さしずをしてやらねばならないことがあるのですが、それをそのままにして長くなっています。それに京へ来たら訪ねようという約束のしてある人もその近くへ上つて来ているのですから、濟まない氣がしますから、そこへも行つてやります。嵯さ

峨野<sup>がの</sup>の御堂<sup>みどう</sup>に何もそろっていない所にいらつしやる仏様へも御挨拶<sup>あいさつ</sup>に寄りますから二、三日は帰らないでしょう」

夫人は桂の院という別荘の新築されつつあることを聞いたが、そこへ明石の人を迎えたのであったかと氣づくとうれしいこととは思えなかった。

「斧<sup>おの</sup>の柄を新しくなさなければ（仙人<sup>せんじん</sup>の碁を見物している間に、時がたつて氣がついてみるとその樵夫<sup>きしり</sup>の持つていた斧の柄は朽ちていたという話）ならないほどの時間はさぞ待ち遠いことでしょう」

不愉快そうなこんな夫人の返事が源氏に伝えられた。

「また意外なことをお言いになる。私はもうすっかり昔の私でなくなつたと世間でも言うではありませんか」

などと言わせて夫人の機嫌<sup>きげん</sup>を直させようとするうちに昼になつた。

微行<sup>しのび</sup>で、しかも前駆には親しい者だけを選んで源氏は大井へ来た。夕方前である。いつも狩衣姿<sup>かりぎぬ</sup>をしていた明石時代でさえも美しい源氏であつたのが、恋人に逢うがために引き繕<sup>のうし</sup>った直衣姿はまばゆいほどまたりっぱであつた。女のした長い愁<sup>うれ</sup>いもこれに慰められた。源氏は今さらのようにこの人に深い愛を覚えながら、二人の中に生まれた子供

を見てまた感動した。今まで見ずにいたことさえも取り返されない損失のように思われる。左大臣家で生まれた子の美貌びぼうを世人はたたえるが、それは権勢に目がくらんだ批評である。これこそ真の美人になる要素の備わった子供であると源氏は思った。無邪気な笑顔えがおの愛嬌あいぎょうの多いのを源氏は非常にかわいく思った。乳母めのとも明石へ立つて行ったころの衰えた顔はなくなって美しい女になっている。今日までのことをいろいろとなつかしいふうに話すのを聞いていた源氏は、塩焼き小屋に近い田舎いなかの生活をしいてさせられてきたのに同情するというようなことを言った。

「ここだってまだずいぶんと遠すぎる。したがって私が始終は来られないことになるから、やはり私があなたのために用意した所へお移りなさい」

と源氏は明石に言うのであったが、

「こんなふうに田舎者であることが少し直りましてから」

と女の言うのも道理であった。源氏はいろいろに明石の心をいたわったり、将来を堅く誓ったりしてその夜は明けた。なお修繕を加える必要のある所を、源氏はもとの預かり人や新たに任命した家職の者に命じていた。源氏が桂の院へ来るといふ報せしらせがあったために、この近くの領地の人たちの集まって来たのは皆そこから明石の家のほうへ来



た。そうした人たちに庭の植え込みの草木を直させたりなどした。

「流れの中にあつた立石たていしが皆倒れて、ほかの石といつしよに紛れてしまつたらしいが、そんな物を復旧させたり、よく直させたりすればずいぶんおもしろくなる庭だと思われるが、しかしそれは骨を折るだけかえつてあとでいけないことになる。そこに永久いるものでもないから、いつか立つて行つてしまふ時に心が残つて、どんなに私は苦しかつたらう、帰る時に」

源氏はまた昔を言い出して、泣きもし、笑いもして語るのであつた。こうした打ち解けた様子の見える時に源氏はいつそう美しいのであつた。のぞいて見ていた尼君は老いも忘れ、物思いも跡かたなくなつてしまふ氣がして微笑ほほえんでいた。東の渡殿わたどのの下をくぐつて来る流れの筋を仕変えたりする指図さしずに、源氏は袿うちぎを引き掛けたくつろぎ姿でいるのがまた尼君にはうれしいのであつた。仏の闕伽あかの具などが縁に置かれてあるのを見て、源氏はその中が尼君の部屋であることに氣がついた。

「尼君はこちらにおいでになりますか。だらしない姿をしています」

と言つて、源氏は直衣のうしを取り寄せて着かえた。几帳きちようの前にすわつて、

「子供がよい子に育ちましたのは、あなたの祈りを仏様がいれてくださつたせいだろう

とありがたく思います。俗をお離れになった清い御生活から、私たちのためにまた世の中へ帰って来てくださったことを感謝しています。明石ではまた一人でお残りになって、どんなにこちらのことを想像して心配していただくさるだろうと済まなく私は思っています」

となつかしいふうに話した。

「一度捨てました世の中へ帰ってまいって苦しんでおります心も、お察しくださいますので、命の長さもうれしく存ぜられます」

尼君は泣きながらまた、

「荒磯<sup>あらいそ</sup>かげに心苦しく存じました二葉<sup>ふたば</sup>の松もいよいよ頼もしい未来が思われます日に到達<sup>ふたば</sup>いたしましたが、御生母がわれわれ風情<sup>ふぜい</sup>の娘でございますことが、御幸福<sup>さいわい</sup>の障<sup>さわ</sup>りにならぬかと苦勞<sup>くろう</sup>にしております」

などという様子に品のよさの見える婦人であったから、源氏はこの山莊<sup>さんじょう</sup>の昔<sup>あき</sup>の主<sup>あるじ</sup>の親王<sup>しんのう</sup>のことなどを話題<sup>わだい</sup>にして語った。直された流れの水はこの話に言葉を入れたように、前よりも高い音を立てていた。

住み馴れし人はかへりてたどれども清水ぞ宿の主人がほなる

歌であるともなくこう言う様子に、源氏は風雅を解する老女であると思った。

「いさらぬはやくのことも忘れじをもとの主人や面変はりせる

悲しいものですね」

と歎息して立つて行く源氏の美しいとりなしにも尼君は打たれて茫となっていた。

源氏は御堂へ行って毎月十四、五日と三十日に行なう普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧のほかにも日を決めてする法会のことを僧たちに命じたりした。堂の装飾や仏具の製作などのことも御堂の人々へ指図してから、月明の路を川沿いの山荘へ帰って来た。

明石の別離の夜のこと源氏の胸によりがえって感傷的な気分になっている時に女はその夜の形見の琴を差し出した。弾きたい欲求もあつて源氏は琴を弾き始めた。まだ絃の音が変わっていなかった。その夜が今であるようにも思われる。

契りしに変はらぬ琴のしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや

と言うと、女が、

変はらじと契りしことを頼みにて松の響に音を添へしかな

と言う。こんなことが不つりあいに見えないのは女からいえば過分なことであつた。

明石時代よりも女の美に光彩が加わっていた。源氏は永久に離れがたい人になったと明石を思っている。姫君の顔からもまた目は離せなかつた。日蔭ひかげの子として成長していくのが、堪えられないほど源氏はいそいで、これを二条の院へ引き取つてできる限りにかしずいてやることにすれば、成長後の肩身の狭さも救われることになるであろうとは源氏の心に思われることであつたが、また引き放される明石の心が哀れに思われて口へそのことは出ずにただ涙ぐんで姫君の顔を見ていた。子心にはじめは少し恥ずかしがつていたが、今はもうよく馴なれてきて、ものを言つて、笑つたりもしてみせた。甘えて近づいて来る顔がまたいっそう美しくてかわいいのである。源氏に抱かれている姫君

はすでに類のない幸運に恵まれた人と見えた。

三日目は京へ帰ることになっていたので、源氏は朝もおそく起きて、ここから直接帰って行くつもりでいたが、桂の院のほうへ高官がたくさん集まって来ていて、この山荘へも殿上役人がおおぜいで迎えに来た。源氏は装束をして、

「きまりの悪いことになったものだね、あなたがたに見られてよい家でもないのに」

と言いながらいっしょに出ようとしたが、心苦しく女を思つて、さりげなく紛らして立ち止まった戸口へ、乳母は姫君を抱いて出て来た。源氏はかわいい様子で子供の頭を撫でながら、

「見ないでいることは堪えられない気のするものにわかな愛情すぎるね。どうすればいいだろう、遠いじゃないか、ここは」

と源氏が言うのと、

「遠い田舎の幾年よりも、こちらへ参つてたまさかしかお迎えできないようなことになりましては、だれも皆苦しゅうございましょう」

など乳母は言つた。姫君が手を前へ伸ばして、立っている源氏のほうへ行こうとするのを見て、源氏は膝をかがめてしまった。

「もの思いから解放される日のない私なのだね、しばらくでも別れているのは苦しい。奥さんはどこにいるの、なぜここへ来て別れを惜しんでくれないのだろう、せめて心地が出てくるかもしれないのに」

と言うと、乳母は笑いながら明石の所へ行つてそのとおりを言つた。女は逢つた喜びが二日で尽きて、別れの時の来た悲しみに心を乱していて、呼ばれてもすぐに出ようとしないのを源氏は心のうちであまりにも貴女ぶるのではないかと思つていた。女房たちからも勧められて、明石はやつと膝行つて出て、そして姿は見せないように几帳の蔭へはいるようにしている様子に氣品が見えて、しかも柔らかい美しさのあるこの人は内親王と言つてもよいほどに氣高く見えるのである。源氏は几帳の垂れ絹を横へ引いてまたこまやかにささやいた。いよいよ出かける時に源氏が一度振り返つて見ると、冷静にしていた明石も、この時は顔を出して見送つていた。源氏の美は今が盛りであると思われる。以前は痩せて背丈が高いように見えたが、今はちよいどいいほどになつていた。これでこそ貫目のある好男子になられたというものであると女たちがながめていて、指貫の裾からも愛嬌はこぼれ出るように思つた。解官されて源氏について漂泊えた藏人もまた旧の地位に復つて、鞍負尉になつた上に今年は五位も得ていたが、この好青年官人が

源氏の太刀を取りに戸口へ来た時に、御簾の中に明石のいるのを察して挨拶をした。

「以前の御厚情を忘れておりませんが、失礼かと存じますし、浦風に似た気のいたしました今暁の山風にも、御挨拶を取り次いでいただく便もございませんでしたから」

「山に取り巻かれておりましては、海への頼りない住居と変わりもなく、松も昔の（友ならなく）と思つて寂しがつておりましたが、昔の方がお供の中においでになつて力強く思います」

などと明石は言つた。すばらしいものにこの人はなつたものだ、自分だつて恋人にしたいと思つたこともある女ではないかなどと思つて、驚異を覚えながらも蔵人は、

「また別の機会に」

と言つて男らしく肩を振つて行つた。りつばな風采の源氏が静かに歩を運ぶかたわらで先払いの声が高く立てられた。源氏は車へ頭中將、兵衛督などを陪乗させた。

「つまらない隠れ家を発見されたことはどうも残念だ」

源氏は車中でしきりにこう言つていた。

「昨夜はよい月でございましたから、嵯峨のお供のできませんでしたことが口惜しくてなりません、今朝は霧の濃い中をやつて参つたのでございます。嵐山の紅葉はまだ早

うございました。今は秋草の盛りでございますね。某朝臣<sup>ぼうあそん</sup>はあすこで小鷹狩<sup>こたかがり</sup>を始めてただ今いっしょに参れませんでした、どういたしますか」

などと若い人は言つた。

「今日はもう一日桂<sup>かつら</sup>の院で遊ぶことにしよう」

と源氏は言つて、車をそのほうへやつた。桂の別荘のほうではにわか客の饗応<sup>きやうおう</sup>の仕度<sup>した</sup>が始められて、鵜飼<sup>うかい</sup>いなども呼ばれたのであるがその人夫たちの高いわからぬ会話が聞こえてくるごとに海岸にいたころの漁夫の声が思い出される源氏であつた。大井の野に残つた殿上役人が、しるしだけの小鳥<sup>こどり</sup>を萩<sup>はぎ</sup>の枝などへつけてあとを追つて来た。杯がたびたび巡つたあとで川べの逍遙<sup>しょうよう</sup>を危<sup>あや</sup>ぶまれながら源氏は桂の院で遊び暮らした。月がはなやかに上つてきたころから音楽の合奏が始まつた。絃楽のほうは琵琶<sup>びわ</sup>、和琴<sup>わじん</sup>などだけで笛<sup>じようず</sup>の上手が皆選ばれて伴奏をした曲は秋にしっくり合つたもので、感じのよいこの小合奏に川風が吹き混じつておもしろかつた。月が高く上つたころ、清澄な世界がここに現出したような今夜の桂の院へ、殿上人がまた四、五人連れで来た。殿上に伺候していたのであるが、音楽の遊びがあつて、帝<sup>みかど</sup>が、

「今日は六日の謹慎日<sup>おとど</sup>が済んだ日であるから、きつと源氏の大<sup>おとど</sup>臣は来るはずであるの



だ、どうしたか」

と仰せられた時に、嵯峨へ行っていることが奏されて、それで下された一人のお使いと同行者なのである。

「月のすむ川の遠なる里なれば桂の影はのどけかるらんをち

うらやましいことだ」

これが藏人くらうどのべん弁であるお使いが源氏に伝えたお言葉である。源氏はかしこまって承った。清涼殿での音楽よりも、場所のおもしろさの多く加わったこの管絃楽に新来の人々は興味を覚えた。また杯が多く巡った。ここには纏頭てんとうにする物が備えてなかったために、源氏は大井の山荘のほうへ、

「たいそうでない纏頭の品があれば」

と言つてやつた。明石は手もとにあつた品を取りそろえて持たせて来た。衣服箱二荷であつた。お使いの弁は早く帰るので、さっそく女装束が纏頭に出された。

久方の光に近き名のみして朝夕霧も晴れぬ山ざと

というのが源氏の勅答の歌であつた。帝の行幸を待ち奉る意があるのであろう。「中に生おひたる」（久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる）と源氏は古歌を口ずさんだ。源氏がまた躬恒みつねが「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵こよひはところがらかも」と不思議がつた歌のことを言い出すと、源氏の以前のことを思つて泣く人も出てきた。皆酔つてもいるからである。

めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

これは源氏の作である。

浮き雲にしばしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるべき

頭中將とちゅうじょうである。右大弁は老人であつて、故院の御代みよにも睦まじくお召し使いになつた

人であるが、その人の作、

雲の上の住みかを捨てて夜半よはの月いづれの谷に影隠しけん

ないろいろな人の作もあつたが省略する。歌が出てからは、人々は感情のあふれてくるままに、こうした人間の愛し合う世界を千年も続けて見ていきたい気を起こしたが、二条の院を出て四日目の朝になった源氏は、今日はぜひ帰らねばならぬと急いだ。一行にいろいろな物をかついだ供の人が加わった列は、霧の間を行くのが秋草の園のようで美しかった。近衛府このえふの有名な芸人の舎人とねりで、よく何かの時には源氏について来る男に今朝も「その駒こま」などを歌わせたが、源氏をはじめ高官などの脱いで与える衣服の数が多くてそこにもまた秋の野の錦にしきの翻る趣があつた。大騒ぎにはしゃぎにはしゃいで桂の院を人々の引き上げて行く物音を大井の山荘でははるかに聞いて寂しく思った。言ことづてもせずに帰って行くことを源氏は心苦しく思った。

二条の院に着いた源氏はしばらく休息をしながら夫人に嵯峨さかの話をした。

「あなたと約束した日が過ぎたから私は苦しみましたよ。風流男どもがあとを追つて来

てね、あまり留めるものだからそれに引かれていたのですよ。疲れてしまった」

と言つて源氏は寢室へはいった。夫人が氣むずかしいふうになつてゐるのも氣づかないように源氏は扱つていた。

「比較にならない人を競争者でもあるように考えたりなどすることもよくないことですよ。あなたは自分は自分であると思ひ上がつていればいいのですよ」

と源氏は教えていた。日暮れ前に参内しようとして出かけぎわに、源氏は隠すように紙を持つて手紙を書いているのは大井へやるものらしかった。こまごまと書かれてゐる様子がかがわれるのであつた。侍を呼んで小声でささやきながら手紙を渡す源氏を女房たちは憎く思つた。その晩は御所で宿直とのいもするはずであるが、夫人の機嫌きげんの直つていなかったことを思つて、夜はふけていたが源氏は夫人をなだめるつもりで歸つて來ると、大井の返事を使いが持つて來た。隠すこともできずに源氏は夫人のそばでそれを読んだ。夫人を不愉快にするようなことも書いてなかつたので、

「これを破つてあなたの手で捨ててください。困るからね、こんな物が散らばつていたりすることはもう私に似合つたことではないのだからね」

と夫人のほうへそれを出した源氏は、脇息きよつてくによりかかりながら、心のうちでは大井の

姫君が恋しくて、灯<sup>ひ</sup>をながめて、ものも言わずにじっとしていた。手紙はひろがったままであるが、女王<sup>にょおう</sup>が見ようとしないうのを見て、

「見ないようにして、目のどこかであなただけは見ているじゃありませんか」

と笑いながら夫人に言いかけた源氏の顔にはこぼれるような愛嬌<sup>あいぎょう</sup>があつた。夫人のそばへ寄つて、

「ほんとうはね、かわいい子を見て来たのですよ。そんな人を見るとやはり前生の縁の浅くないということが思われたのですがね、とにかく子供のことはどうすればいいのだろう。公然私の子供として扱うことも世間へ恥ずかしいことだし、私はそれで煩悶<sup>はんもん</sup>しています。いっしょにあなたも心配してください。どうしよう、あなたが育ててみませんか、三つになつてゐるのです。無邪気なかわいい顔をしているものだから、どうも捨てておけない気がします。小さいうちにあなたの子にしてもらえば、子供の将来を明るくしてやれるように思うのだが、失敬だと思ひにならなければあなたの手で袴着<sup>はかまぎ</sup>をさせてやってください」

と源氏は言うのであつた。

「私を意地悪な者のようにばかり決めておいでになつて、これまでから私には大事なこ

とを皆隠していらつしやるものですもの、私だけがあなたを信頼していることも改めなければならぬとこのごろは私思っています。けれども私は小さい姫君のお相手にはなれますよ。どんなにおかわいいでしよう、その方ね」

と言つて、女王は少し微笑ほほえんだ。夫人は非常に子供好きであつたから、その子を自分がもらつて、その子を自分が抱いて、大事に育ててみたいと思つた。どうしよう、そうは言つたもののここへつれて来たものであろうかと源氏はまた煩悶はんもんした。

源氏が大井の山莊を訪うことは困難であつた。嵯峨さかの御堂みどうの念仏の日を待つてはじめて出かけられるのであつたから、月に二度より逢あいに行く日はないわけである。七夕たなばたよりは短い期間であつても女にとっては苦しい十五日が繰り返されていった。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---